

# “音齋人”

# “新聞”

“音齋人”は“音齋処”に集う人の総称です。どちらも「おんさいと」と読みます。そしてこの小紙は、“音齋処”の活動についてと、そこに集まる“音齋人”についてお知らせするものです。

“音齋処”は「おんさいと」と読みます。これは『書齋』という語があるのから『音齋』という語もあつて良いのではないか、との思いつきで『主にレコードやオーディオを楽しむ場所』の意味の造語です。さらに活動場所である岩村の偉人、儒学者の佐藤一齋先生から一文字をいただいています。

“音齋処”は岐阜県恵那市岩村町の裏通りを入った処にある、今は住まわれなくなった古い民家を利用して、冬眠時季を除く毎月一回、第四土曜日に開催しているレコードコンサート、並びに、このレ

コードコンサートを開催している場所そのもの、を指しています。

本格的な活動を始めたのは二〇一六年三月で、まだまだ生まれればかりなので、歴史ある岩村においては全くの新参者です。それ故まだまだ地元でも無名の存在なのです。

“音齋処”の活動を一言で表せば、『レコードをかけてます』ということですが、最近巷では、またレコードが流行っているそうです。皆さんも色々な所で、レコードを使った企画を目に、耳にすることも多くなつたのではないのでしょうか。

家には捨てられないレコード盤が何枚もあるけど、再生装置がなくなつて自由に聴けない、そんな声が多くなり、各地で様々な催しとしてレコードをかけるものが多くなっています。“音齋処”もそんな催しの一つといえなくもありません。

“音齋処”の最大の特徴は『良い音でレコードを聴く』ことにあります。

『良い音でレコードを聴く』などと書くとなんだか小難しくなりますが、音楽用に作られた場所でもない古い民家が、とても良い音でレコードを再生してくれます。

これはもう実際に来ていただいて、聴いていただくしかないのですが、とにかく音の響きがよいのです。

これは“音齋人”の誰もが共通に驚くことなのです。「こんな場所でなんでこんなに良い音がするの」と…それほどなんでもない古い民家なんです。

その音の良さを活かして、或いは、活かすために、“音齋処”では他では滅多に聴くことのできないオーディオ装置を使用しています。その一つが、針を使わないレコードプレーヤー、世界で唯一の光学式のレコードプレーヤーである「レーザーターントーブル」なのです。それ以外にも一九七〇年代に一世を風靡した、

古いオーディオ装置を修理しながら使っています。

もちろん懐かしいレコード盤も沢山所蔵しています。ほとんどが地元の方々より寄贈されたLPやシングル盤ですが、新たに「音齋処」に來られた方からの寄贈品も増えてきました。

「音齋処」では、こうした所蔵レコードだけでなく各自が持ち寄ったレコードを使いながら、毎月一回テーマを決めて、皆さんとレコード音楽を楽しんでいます。但し、そのテーマはややマニアックなものが多いかもしれません。基本的に自分たちの聴きたいレコードを大きな音でかけて、ワイワイガヤガヤと楽しむことにしています。

## 「音齋処」の運営

「音齋処」でレコード音楽を楽しんでいただくのに料金は必要ありません。入場無料です。それどころか、入退場自由です。ふらつと入ってふらつと出ていって

構いません。気が向いたら又入ってきていただければ良いのです。

入場料も取らないで、活動資金をどうしているのかですが、基本は手弁当です。行政から補助金を貰っているのでもなく、どこかの団体から活動資金が出ていなくてもありません。ボランティアというほどカッコイイものではなく、レコード好きが集まって自主的に運営しているものなので、組織といえるものはありません。また、組織化をしようとも思っていないません。

唯一つだけ暗黙のルールがあります。それは、「音齋処」が気に入ったり、流れたレコードが気に入ったら、幾許かのドネーション（寄附）を置いていく、ということです。もちろん強制ではありません。

一例ですが・・・  
「音齋処」ではドリップ珈琲を提供していますが、その際紙コップを百円で買っていたいただいています。同じ紙コップでお代わりしていただいても構いません。この珈琲が意外と評判が良いのです。

あと、プログラム終了後に「楽しかった」「久しぶりに良いレコードが聴けた」と寄附をいただくこともあります。

「音齋処」は、商売目的のお店ではありませんので、地元の方の商売の邪魔をするつもりはありません。

「音齋処」の皆さんはその処もよくわかっていて、お昼前の早めに来て、かんから餅、五平餅、蕎麦などで昼食をとられ、帰りには街歩きをしながら、お酒やカステラをお土産に買っていただいている様なのです。

こんなゆるゆるの運営でもやっていけるのは、地元・岩村の皆さんのご理解と、陰日向になってのご協力の賜物たまものなのです。心より感謝をしております。

さて『「音齋処」新聞』の創刊号は、いかがでしたか？

次号はいつになるかはわかりませんが、お楽しみにお待ちください。

発行◇平成二十九年四月二十六日  
発行人◇「音齋処」主催者

横田 文孝